

ヒグマ

―その個体群の現況と今後―

青井俊樹

一、はじめに

近年、北海道における野生をとりまく状況は大きく変化してきている。たとえば、日高山脈縦断林道の計画や知床横断道路の開通、パードサンクチュアリーの開設、そしてキタキツネブームなど即座にいくつか頭に浮かぶ。

そういった中でヒグマをめぐる状況は、相当昔から狩猟と有害駆除の二つの制度が維持されてきており、捕獲一本槍ということではあまり変化がないようにみえる。これは先進諸国ではまれにみる制度で、発展途上国でさえ大型獣に関しては、このような一方的な捕獲制度は多くない。

ところで道内のヒグマの個体群や、あるいは人間等との社会的関係も同様にあまり変化していないのだろうか。昔ながらのヒグマ王国・北海道は今後ともありうるのだろうか。そして今後、われわれは彼らとどうつきあって行けばよいのか。そんな点に焦点を当ててヒグマの生活を紹介しつつ、現在のヒグマの真の姿に少しせまってみたいと思う。

二、春とヒグマ

早春、ヒグマ達は長い冬ごもりを終えて冬眠穴より出てくる。北大天塩地方演習林及び、それを含む道北地方一帯（名寄以北、羽幌以北）における最近六年間のわれわれの知り得たヒグマ初認日と、その年の演習林庁舎付近における消雪日を表1に示す。この

ヒグマ初認日は初捕獲日と重なっている年もある。

この表から道北地方におけるヒグマの冬眠明けは、およそ四月十日前後から始まると言える。むろんこれは、各個体がこの時期に一斉に穴から出てくることを示しているわけではない。冬眠穴の場所、個体の大きさ、あるいは内的条件等によってその時期はかなり幅を持っている。特に親子連れは単

独個体に比べ、一般に穴から出るのが遅くなる傾向にある。ところで、彼らは一体何をきっかけに穴から出てくるのだろうか。残念ながら明確な解答はまだ持ち得ていない。一番関連が考えられるのが、その年の雪どけの状態である。特に本年のように異常に春先に暖い日が続いて雪どけの早かった年は、初認日も四月二日と早く、またその後の捕獲も、四月八日に三頭、九日に一頭、十日に一頭と、各所で例年より相当早い捕獲が続いた。たしかに雪どけの状態と冬眠明け時期にはかなり関連がありそうではあるが、雪どけが冬眠からの覚醒に具体的にどう影響を与えているのか不明である。

また一口に雪どけの状態といっても、その年の積雪量、春の平均気温、風の強さ、方向などに大きく作用されるため、冬眠明けの外的要因を知るには、これら諸々の条件を総合した形で考えて行かなければならない。



表1 道北地方におけるヒグマの足跡初認日と消雪日

(青井、1981を一部改変)

年 度	単 独	親 仔	消雪日
'78	4.10	—	4.20
'79	4.8	4.17	4.27
'80	4.7	4.25	4.26
'81	4.7	4.17	4.23
'82	4.14	4.14	4.27
'83	4.2	(4.15)	4.11

1. 消雪日は北大天塩演習林(間寒別)の記録による。
2. ()は冬眠穴内での捕獲

図1 北大天塩演習林及びヒグマ捕獲個体調査地位位置図



一方、北海道で最も暖いと思われる道南地方では、冬眠明けは道北より数段早いようである。今春より、渡島半島全域における捕獲個体調査が主に北大ヒグマ研究グループの手によって開始された。その結果、この春、同地域において捕獲されたヒグマ四三頭中——地域、春の捕獲としてはこの数だけでも相当なものだが——八頭までが三月中に発見されたもので、全体の四二%に及ぶ。ただし、中には穴狩りによって捕獲されたものもあり、また道南も例年になく早い雪どけだったとのことで、まだあまり厳密に冬眠明け時期の違いは言えないにしても、同じ北海道でも北のはと南のはてははかなり生活様式に違いがあることが予想される。

ヒグマは通常真冬の一月末から二月にかけて出産する。新生児は毛も生えておらず目も開かない状態で、体重も四〇〇〜五〇〇gに過ぎない。それが道北では、春冬眠穴から出てくる四月末には四ヶ月後にもなっており、急速な生長を示すわけである。

ところで、道南においても○才仔、すなわち当才仔連れ親仔も他の個体同様、道北より早く出てくるのだろうか。その点に関しては今春四月十

図2 冬眠穴入口(クマの右)とヒグマ(北大天塩演習林)



七日捕獲という一例が四月八日にも親仔は獲れているが、これは穴狩りによるものである。あるだけで、手元にあまり詳しい資料がないのはつきりしたことは言えない。しかし、もしそういう傾向があるとすれば、道北よりかなり未成熟な状態で穴から出てくることになるのではないだろうか。アメリカクロクマでは、彼らにとつて最も危険な時期は冬眠直前と冬眠終了期(四〜五月)であり、この時期の天候と食物が彼らの、特に親仔連れの生存に大きな影響を与えるとされている。ヒグマにもそれがあてはまるとすると、道南の当才仔がより未成熟な状態で穴から出るような事実があるならば、道南の個体群の動態を考える中で無視できない点となるかも知れない。いずれにせよ、今後とも捕獲個体の資料収集に努力するほかはない。

いまさら言うまでもないが、春はヒグマ猟の季節であり、一部の地域を除いて一年で最もクマが捕獲される時期である。あとで詳しく述べるが、いわゆる有害鳥獣駆除による捕獲である。

積雪が残っているこの時期は、クマ撃ちに最も都合がよい。つまりササヤカン木はすべて雪の下にかくれ見通しがきくうえに、どこでも歩くことができるため一日の距離をのぼすことができる。さらに、クマの足跡がえんえんと雪の上につくため発見も容易であり、かつ追跡も行いやすいという、きわめてクマ撃ちの好条件がそろっているわけである。

それでも一昔前までは交通の便もいまほどよくなく、銃器の性能もそれほど発達していなかった。したがってかつては何日分もの食糧を背負い、村田銃を肩に泊りがけて山を歩き回る例

図3 有害鳥獣駆除に捕獲されたヒグマ
1974. 4. 北大天塩演習林



もあつたようである。また仮に日掃りにしてもあまり奥山まで足をのばせず、ハンターの数もそれほど多くはなかった。
しかし現在は様相が一変している。林道網は奥山までのび、除雪してある所も少なくない。

仮に除雪していなくてもスノーモービルの利用により、以前なら一日がかりの所までわずかの時間で着いてしまう。また村田銃では射程はせいぜい五〇〜七〇mくらいだが、ライフルでは二〇〇m〜三〇〇m先から撃つことも可能である。

さらに近年は多くのハンターが高性能無線器を駆使して、数人のグループによる連携プレーを行っている。一担足跡を発見したら、状況を判断し、先回りする者、途中で待機する者、足跡を追う者などに分かれて捕獲する、いわゆる巻き狩りに近い猟を行っている所もある。巻き狩りそのものは、参加者それぞれが地形やクマの習性にそれなりに精通していなければならず、また超ベテランの指揮者が必要だが、無線機の使用によりベテランでなくても十分猟に参加できるようになった。そのせいもあるのか、最近のクマ

マ撃ちハンターの多いことにはおどろくばかりである。天塩演習林内にもピーク時の日曜などには、三〇名近くのハンターがわずか数頭のクマを追いつめて入山してくる。

これらのことからわかるように、近年のヒグマに対する狩猟圧の高まりは質量ともに相当なものである。その割に捕獲数が増えるどころか減っているのは何をもの語っているのか、詳しくはまた後でふれたい。

幸いにして？クマが捕れると、その場で解体する場合と、里まで引きずり降ろして解体する場合の二つに分けられる。一つでも多く野生のヒグマの体重、外部形態、内臓各部位等の精査を行いたいわれわれとしては、どこで解体されるかが大きな問題である。里まで降ろす場合、解体はたいてい捕獲の翌日になることが多く、解体に間があう場合が時々ある。しかし、捕獲したその場ですぐ解体されたらお手上げである。ただでさえ一地域でそうたくさん捕れるわけではないので、野生個体の精査データを集めるのは非常にむずかしい問題である。ある年など北見枝幸の山奥で捕れたというハンターからの連絡に、演習林のある問寒別を明け方に出発し、約一二〇kmほどの道をすつとばしてかけつけ、ハンターと一緒に里までかつぎ降ろしたこともある。解体の前や途中でいろいろ手間のかかる測定を

気持よくやらせてもらうには、やはり里にかつぎ降ろすところから手伝うことが大事である。一体にハンターは初対面の、ましてクマ猟に批判的だと思われがちなわれわれに對して、最初はかなり排他的である。しかしかつぎ降ろすことを手伝うなどして一担こちらを知ってもらうと、それなりに協力的になつてもらえ、次回からもまた撃つたら連絡してくれるということになるわけである。

幸いにして最近演習林内で捕れた場合は、解体する前に必ずこちらに連絡してもらえようになり、時には事務所の前までわざわざ捕ったクマを丸ごと運んで来てくれたりして、いささかこちらが恐縮してしまうこともある。

捕獲個体の精査は、その機会が少ないだけに精査の中身それぞれに非常に興味を引かれるが、中でも体重、胃袋の中身、繁殖器官の解剖学的所見などは、飼育下のヒグマと大きく異なつてることが予想され、特に興味深い点である。

ヒグマが捕獲されるとよく新聞記事になるが、その中で推定年齢と体重が常に報道されている。しかしほとんどの場合がいかげんな数値で、特に体重についてはきわめて過大な値が多いようである。三〇〇kgを越したような記事もよく見られるが、おそらくそのようなクマは、いまや皆無に近いくらいまれであるといつてよいと思われる。いままでの調査例から野生個体の体重について簡単に述べると、いずれも春の段階で〇才(当才)で四kg〜五kg前後、満一才で二五kg〜三五kgとなり、雄では満三才(いわゆる明け四才)で一〇〇kgを越す個体もでてくる。そして成獣の最大はおそらく二五〇kg前後と思われ、二〇〇kgを越すもの自体それほど多くはない。一方、雌は四〜五才から上はあまり大きくならず一〇〇kg前後が多く、大きくても一五〇kgくらいまでのよつてである。

胃袋の中身は、春先の食性を知るためにきわめて有効な資料となる。特にヒグマは、あまり十分咀嚼せずに飲み込むため胃袋の中に原形をとどめた食物が多く、同定するのに都合がよい。

しかし道北地方では、四月中に捕られた約半数のクマの胃袋は空である。穴から出て一週間以上もハンターの追跡から逃げ回った後、撃たれた個体でも、胃、腸内とも空である例はしばしばある。何も食わずに一週間以上も走り回っているわけである。おそるべき体力と言わねばならぬ。一般にヒグマは穴から出てもすぐに採食のため長距離を移動することは少なく、穴の回りで足ならしをしたあと、雪の割れた沢筋や、雪の落ちた南斜面などで少しずつ採食を始めるようである。アメリカのクロクマでは、平均七日は穴の近くにとどまっているという報告もある。

したがってこの時期、胃袋の中に食物が入っていても一〇〇g前後と少ないことが多い。その中身のうちわけはというと、道北ではザゼンソウの新芽の地下部が最も多く、そのほかにドングリ、オオアキの新芽、ザリガニなどがみられる。時にはアルミホイルの断片や、タバコのフィルターといったものもあり、ハンターや山林従事者のなげすてたものを食べたのであろう。

春先はクマの足跡を追跡しやすいことは先にも述べた。この利点を利用すると多くのことを調べることができる。冬眠穴を出てからの行動のパターンたとえば一回で完全に穴から離れないで何日か出入りをくり返すのかなど、穴から移動開始後の一日当りの行動量、行動ルート、食性、そして他個体との関係あるいは足跡を逆につけることによる冬眠穴の発見など、足跡がもたらしてくれる彼ら本来の生活様式に関する情報はきわめて多岐にわたる。

しかしこれらの情報は、あくまでも誰にじやまされることなく自然の行動をとった場合に、初めて生きてくるのである。ハンターに追われて逃げまわっている足跡をいくら調査しても、そこからわかるのは逃走下の行動でしかなく、本来の行動様式を知ることにはむずかしい。狩猟庄の高まりとともに、ハンターに追跡されずに自由に歩き回っているヒグマの足跡を、われわれが何日も連続して調査できるような機会に少なくともなくなってしまった。見つける足跡のほとんどがどこからか追込まれてきたものか、あるいは最初は誰にも追われていない足跡と違ってゆっくり行くと、突如スノーモービ

ルの追跡あとに出くわすなどということもめずらしくない。そのような場面に出くわすと、一度に気が抜けてしまう。あけくのはてにいままで一生懸命調査・追跡していた個体が、その先で山々にこだまする幾発かのカン高い銃声と共に消え去ってしまったとあつては、さあ今度はすぐその捕獲個体の計測だ、頭骨の借り受けだと頭を切りかえねばならない者にとつて、虚心坦懐の四文字が十字架のごとく浮かんでくるのである。

しかし、そういった悲壯感にも似た感情も事態を好転させるきっかけにはならない。現実には集積し得るデータは減り、かつ、クマも減りつつあると思われるのだから。

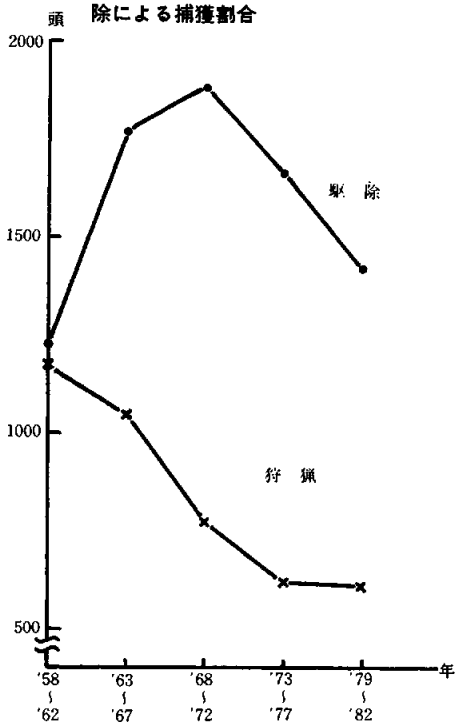
そこで、筆者らは天塩演習林の所在する地元の猟友会の方々と、昨年より事態の好転を期して話し合いを開始した。すなわち、できれば来年以降とりあえずむこう数年間は、演習林の西半分(約一万三千ha)は、調査研究の遂行と、資源維持のためクマを自主的に遠慮してもらえないかという話し合いを行っている。ただヒグマは他の動物とちがって、その秘めたる殺傷能力から万が一ということをも考えねばならない。地元、特に農家の存在、立場というものも十分考慮しなければならぬ。特に開墾別のように純酪農地帯で、何千という牛が山中の沢の中までも放牧してある所ではなおさらである。

万が一の時には直ちに猟友会に協力を依頼しなければならぬこともある。したがって開墾別のごとく人里とクマの生息地とが接近し、所によつてはたがいに入り込んでいくような地域では、演習林の権限を利用して一方的にヒグマ禁猟区として、ハンターをしめだすという方策は取つてはならないような気がするのである。そこで、こちらの真意を理解してもらい、自主的に遠慮してもらおうという線て話をすすめているわけである。だが言うは簡単だが、この近辺では一番のクマの猟場である演習林で、半分とはいえず質的にクマが撃てなくなるわけだからそれなりの抵抗も予想されるし、すでにいくつかあることはある。

今後とも話をつめていかねばならない。だが、ハンターにとつて最大の獲物であるクマを近い将来になくしてしまうよりは、末長くクマ撃ちが続けられた方がいいはずだという論理は決して無理な話ではなく、それなりに理解を示してくれるハンターがけっこういることは心強い限りである。

有害駆除、狩猟

図4 有害駆除、狩猟によるヒグマの捕獲数の変化（5年毎の合計値）、及び各5年毎の年平均捕獲数と総捕獲数に対する駆除による捕獲割合



481	562	530	455	406	頭
51.0	62.8	70.9	73.0	69.9	%

三、捕獲実体 Ⅱ狩猟統計から読めるものⅡ

ヒグマを捕獲する許可の形態には二つある。一つは狩猟免許による捕獲で期間内（十月一日から一月三十一日）ならばどの地方に行つて捕つてもよいというもの。もう一つは有害鳥獣駆除の許可による捕獲で、これは許可範囲が限られており、主に当人が居住する支庁管内だけである。ただし休猟区や鳥獣保護区でも捕獲できる。極端な場合、最も規制のきびしい特別保護区でも捕獲可能なのである。期間は、市町村によって違いがあるようだが、道北では一般に三月十五日頃から五月いっぱいぐらいのようで、さらにその後九月まで継続してもらう場合が多い。また万一の場合には、緊急出動ということ事後承諾も有り得る。結局ヒグマは、一年中いつ捕獲されてもおかしくないわけである。

それでは、この駆除と狩猟によって実際のどのくらい捕獲されており、その年変動はどうなっているのだろうか。一年毎の駆除と狩猟の統計をみると、特に春グマが雪どけの状態に大きく左右されるため年変動幅が大きく、傾向をつかみにくい。そこで図4は、一九五八年から昨八二年までの駆除及び狩猟による捕獲数を五年ごとに合計して変化を

みたものである。

それによると、駆除では六八〜七二年に飛びぬけて捕獲数が増加したあと、ここ一〇年は減りつつある。一方、狩猟による捕獲数は二五年間一貫して減少傾向が続いている。これらの傾向から二つの問題点があげられる。一つは生息数自体の減少が考えられるのではないかとということ。もう一つは第一の問題とも関連するが有害駆除の妥当性という点であり、この二点について少し考えてみたい。

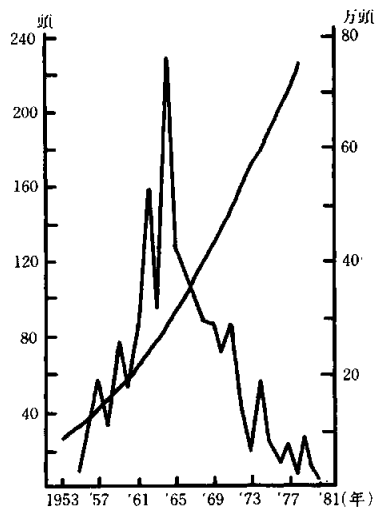
駆除の場合、近年はその過半数以上が春グマ狼によって捕られたもので、この傾向は一九六〇年代以降顕著になってきた。この春グマ狼は先にもふれたが、ほとんどの場合残雪を利用して行うため、その年の雪どけの状況に大きく左右され、したがって年次変動がきわめて大きくなる。つまり捕獲数がしばらく落ち込んだからといって、クマが減ったからだとは一概に言いがたい面がある。しかし先にも述べたような林道網その他の充実により春グマ狼そのものが近年非常に広範囲に、かつ効率よく行えるようになってきているのだが、それに対し、最近一〇年間の捕獲数は相当減少傾向にある。

一方、狩猟期間である秋は狼を行ううでの条件の、年による変化は春に比べるときわめて少ないと言える。つまり毎年比較的同様な条件下で狼を行えるということである。ただ捕獲努力の変化については手元に詳しい資料がないので断言できないが、国民の生活も年々豊かになり、ハンティングがレジャーとしてより一般化してきた現在、捕獲努力指数が下がっているとはとても思えない。こういった狩猟にまつわる状況にもかかわらず、捕獲数が二〇年以上にもわたって減少しているわけである。

これらのことを総合的に考えると、全道の生息数そのものがかなり減少してきている結果のあらわれではないか、と判断せざるを得ない。その原因としては、奥地開発等による生息域の減少、環境条件の悪化も考えられるが、やはり一番大きいのは捕獲によるところであろう。この総捕獲数の実に七〇%前後を占めているのが有害駆除による捕獲である。（図4下覧）

では一体、彼らは何をもって有害とみなされるのであろうか。有害駆除の名目として、被害の未然防除という言葉がよく使われる。すなわち夏から秋にかけてクマが人里に出てきて、人畜・畑作物に害を与えるのを未然に防ぐという意味である。しかし未然防除と言っても、どのクマとどのクマが問題性のあ

図5 ウシの飼養頭数と被害頭数の変化
(梶・宇野1982を一部改変)



また同町では、他の多くの町村同様、駆除活動のための出動補助金の制度をとっている。ただ同町では、補助金を出動した人に直接支払うのではなく、ハンターのかけている保険のかけ金に使用しているようである。

このような制度も実情に合わない点も多くなっている。有害駆除とはいえ、クマ撃ちを大いなる趣味あるいはレジャーの一

る個体だからいまのうちになんとかしておこう、という選択性があるわけではない。とにかくすべてのクマが害を与える危険性を持っているから、捕れる時に捕れるだけ捕っておこうという発想である。

では、ヒグマは現在もおおそれほど有害な動物なのだろうか。図5に示されているようにヒグマによる被害で一番よく話題になるウシは、その飼養頭数の急速な増加に反し、被害は著しく減っていることがわかる。またその他の被害についても、単行本「エゾヒグマ」に詳しいが、ほとんどの場合大幅に減少してきている。一方、人間の被害だが、一九七二年から八一年までの一〇年間にクマにおそわれて死亡した人は九人、年平均〇・九人という値であり、山でハチに刺されて死亡する人より少ないのではあるまいか。もちろん一人でも死亡しているということは決して軽んじられないが、人間側の注意と対処の仕方によってはさけられた場合もあったと思われる。通常ヒグマは人間の気配を感じたら一早く逃げてしまい、やたらにおそってくるものではない。

道庁では、有害駆除にともなう捕獲奨励金制度を数年前より廃止した。それにならって同制度を廃止した市町村もあるが、まだ独自に続けている所もある。たとえば道北のある町では、年間一〇万円の奨励金を予算化している。年に一頭しか捕れなければその一頭に対して一〇万円、二頭捕れば五万円ずつ支払われるわけである。

また同町では、他の多くの町村同様、駆除活動のための出動補助金の制度をとっている。ただ同町では、補助金を出動した人に直接支払うのではなく、ハンターのかけている保険のかけ金に使用しているようである。

このような制度も実情に合わない点も多くなっている。有害駆除とはいえ、クマ撃ちを大いなる趣味あるいはレジャーの一

つとして山へ出かけるハンターが多く、そういった人達は毎年春を楽しみにしているのである。もし首尾よく捕獲できれば毛皮とか胆のう(クマの胆)を売るにより、かなりの金額——頭当りおよそ三〇万—四〇万円くらいにはなろうか—を手にすることができる。しかもそれプラス奨励金ということになる。シーズンの日曜日にでもなれば多数のハンターが目の色を変えて山中を歩き回る気持もわかろうというものだ。

市町村の奨励金のほかに、国有林すなわち営林署が払っている謝金のようなものもある。これはハンター個人に払われる場合もあるが、主として猟友会の支部もしくは各都会単位に払われるものである。これは、たとえばこれから作業に入る予定の地域に、先にハンターに入ってもらいたい空砲を撃つなどしてクマを(居るか居ないかわからなくても)どこかよそへ追いはらってしまおうとか、もしその地域でクマが見つかれば捕ってもらおうことのお礼といった性格のものである。また作業中、近くにクマの気配があったら直ちに撃つてもらったり、あるいは護衛を依頼することもあるなど、いささか過敏とも思え、これは一種の組合対策のような感じがする。

種々の動物が多数住めるような森林を育生するのが真の山作りだと思いが、北海道の森林の五〇%以上を占める国有林が、こう片っぱしからクマを目の敵にしたのでは、ヘルメットをかぶった可愛いクマの看板(最近あまり見なくなったが)が泣こうというものだ。それでなくとも、ろくに動物も住めなくなるような伐採、あるいは造林をどんどん行っている国有林はハンターの間でも強い批判がある。曰く、クマがいなくなったのは木を片っぱしから切ってハゲ山にして行くからだ——。以上がヒグマをめぐる奨励金のあらましである。

ハンターの一部には、冬の間仕事が無いため生活費のたしにしようという人もいないではないが、多くの場合、多少疲れるが健康にはよいし、趣味と実益をかね、かつお上からも奨励されている仕事だという大義名分もあり、一度クマを捕つたらやめられないというのが有害駆除の内情と言え。そろそろこのへんで、有害駆除の制度をみなおしてもよい時期に来ているのではあるまいか。

四、道内のヒグマ個体群は如何に

全道のヒグマ個体群の現状を知ることには、ヒグマの将来がどうなっていくのか、また

われわれの対処の仕方はいかにあるべきか、などといったことを考えて行くうえできわめて重要なことである。

しかし、捕獲統計の資料だけからそれを知ることはきわめて不十分である。一番よいのは片っ端から生け捕りしてクマの性別、年令、仔連れの有無などを調べ、記号をつけて放逐して長期間追跡調査を行うことである。実際アメリカのイエローストーン国立公園では、そのような調査を十数年間継続して多大な成果をあげている。だが残念ながいまの日本では、とうていそのようなことは無理だと言わざるを得ない。そこでせめても捕獲された個体だけでもできるだけ精査することが必要であり、そこからはそれなりに多くの情報を得ることができるといわれる。とりわけ歯の歯根部のセメント層に形成される年輪によって、正確な年令が査定できる技術がアメリカで開発されたことにより、捕獲個体の年令構成を正確に把握できるようになった。

そこで筆者らは北大ヒグマ研究グループと共同で、全道各所の捕獲個体の調査を行っている。全道各所とは言っても図一に示した道南の渡島半島全域、札幌周辺、道北一帯、そして知床半島が主なところで、知床半島では斜里町の知床博物館に協力するという形で行っている。

道央、特に北海道の屋根とも言われ、ヒグマの分布の一つの中心地と思われる大雪山系での調査が欠けている点は大きな問題で、今後なんらかの方策で埋めていかなければならないと思っている。しかしいまの体制では、これ以上手を広げるのは正直言ってみずかしく、思い切った方法が必要と思われる。

各地域の中でも、最も長い間調査を行っている道北地方における過去一〇年間の捕獲個体の年令構成を図7に示す。

図6 ヒグマの犬歯の歯根部に見られる年輪 34才±の個体のもの

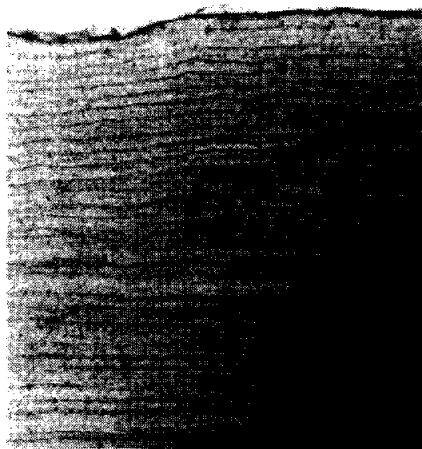
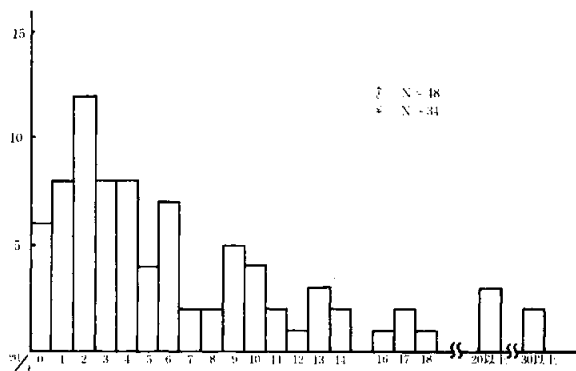


図7 道北地方における捕獲個体の年令構成 (1974~1983)



これを見ると、若令の個体が非常に高い割合を占めていることがわかる。満三才以下が全体の四一%を占めており、満四才までとなると五〇・六%と、半数以上が幼獣、亜成獣で占められている。これを雌雄別でみてみると、雄の総数四九頭中三才以下は二三頭で四六・九%、四才以下になると実に六一・二%という高い割合を示す。雌では、総数三四頭中三才以下が三五・三%、四才までが三八・二%となり、かなり高い割合ではあるが雄ほどではない。この雄の比率の高さは、分散個体の若雄が春早くから高い活動性を示して捕られやすいことも一つの原因として考えられる。

いずれにせよ若令個体の捕獲数がこのように多いことは、狩猟圧が非常に高いため、個体群の増殖率を高めている結果のあらわれでもあると考えられる。

次いで最近四年間の道北地方の捕獲個体の平均年令と雌雄別の捕獲数を年ごとにまとめたものを表2に示す。サンプル数がやや少ないため断定はできないが、八一年の雌を除いて捕獲個体の若令化の傾向が見られ、高い狩猟圧によって高令個体がいなくなってきたことも考えられる。八一年の雌が高くなったのは三四才土という信じ難いような老令個体が一頭いたためで、この一頭を除いて計算すると、雌の平均八・五才、雄雌平均で七・二才となつてかなり穏当な数値となり、若令化の傾向を一層印象づけている。

八三年は先にも述べたように雪どけが非常に早く、駆除猟も例年になく早くきりあげたという特別な事情も考慮しなければならぬが、この数値だけを見ると、北米のクロクマやグリズリーの地域個体群の中でも生息数が減少したため管理保護策をとり始めた地域の平均年令に近い。

表2 道北地方における捕獲個体の性別平均年令 (1980~1983)

年度	'80	'81	'82	'83
雄(オ)N(頭)	7.5 10	5.3 4	3.8 12	3.4 7
雌(メ)N(頭)	9.2 5	12.1 7	6.0 9	3.2 5
合計(計)N(頭)	8.1 15	9.6 11	4.7 21	3.4 12

親仔連れで獲られる割合が高いのも特徴的である。

親仔がらみで捕獲された雌(親だけ捕った。あるいは仔だけ捕った場合を含む)が、全体の雌捕獲数に占める割合は六一・八%とかなりの高率である。

親仔連れの場合、穴から出るのが少し遅い傾向があるとは言え、親が仔をかばって逃げ足も遅く、またハンターも一度に複数個体を捕獲できる親仔連れの足跡を発見すれば好んで追跡するなど、捕獲されやすい傾向がある。したがって一旦穴から出てしまった親仔連れは、捕獲される確率がかなり高いと思われる。このことは、繁殖基盤におよぼす影響も大きく、また一度に多数捕獲されるため捕獲総数を押し上げている原因の一つにもなっている。クロクマやグリズリーでは親仔連れ、もしくは仔グマの捕獲を禁止している所もあり、管理保護の一つの方策となっている。

次いで道南の場合は、まだ精査を始めたばかりだが八三年春の調査では捕獲個体四三頭中四才以下が六五・一%と道北なみか、あるいはそれ以上に若令個体の捕獲割合が高い傾向がうかがえる。これは狩猟の一層の高さを物語っていると共に、他地域に比べ繁殖率を高く維持できるような、食物を主とする環境条件か何か備わっているような気がしている。しかし一方では、農作物の被害が一番多いのも道南であるという矛盾するような現象がおきている。今後、捕獲個体の調査とともに、生息環境の解析を含めた生活様式の調査をいっそうおしすすめる必要がある。

知床半島では、捕獲個体の調査についてはまだ体制も不十分で結果も未集計なので詳しくは述べることができないが、七八年時点で推定生息数一三五頭という数値も報告され、その後も捕獲が相当すすんでいるため、生息数の減少がうかがわれる。ただし斜里猟友会が独自に、国立公園、特に鳥獣保護区内での有害駆除を自衛しようという動きが

道北地方における個体群は、もしかしたらかなり危険な段階にきていることも考えられる。事実、天塩演習林内での痕跡調査でもここ数年の痕跡数の激減はおどろく程である。今後、特に二〜三年以内の調査結果が重要な意味を持つてくるかも知れない。一方、この一〇年間の雌の捕獲数の中で

あることは喜ばしい限りである。しかし知床横断道路の開通など、今後の課題も大きい所である。

五、保護管理に関して

いままでいくつかの方向から北海道のヒグマの個体群についてながめて来たが、いずれの方向からみてもこのまま行くとエゾヒグマの将来は問題多いと言える。筆者はやみくもな保護論を述べるつもりは毛頭ない。しかし、ヒグマをしてなかなば無意識的に有害獣たらしめようとしている社会の動向と、そういう動向の故とは言え、あまりに理に合わないヒグマ駆除論が、あたかも大衆のコンセンサスを得たかのようにまかり通っている現状に、少なからぬ義憤を感じ得ないのである。ただ筆者も、調査研究の美名の下に、直接手を下さないにしろ結果的に数頭のヒグマを死に至らしめてしまったという事実をまず大いに反省したうえで、今後の北海道のヒグマにどう対処して行くべきか考えて行きたい。

ヒグマはその秘めたる殺傷能力故に、常に絶対とは断定できないにせよ、先にも述べたようにその有害性はもはやほとんど根拠のないものと言える。したがって現在とられている有害駆除制度は、いまや非現実的なものとなつてしまった。しかし現在の有害駆除を即刻廃止せよということも言えない。それは、一つには駆除をやめて狩猟一本にする、狩猟にきわめて大きな地域差がでて生息数に著しい片寄りを生じさせる可能性があるからである。たとえば、林床に高いササが密生する道北地方や日本海側地方では、猟期内の捕獲はきわめて少ない。つまりほとんどクマが捕れなくなるということである。いま一つには、人とクマとの軋轢が生じなくてすむように維持するには、環境収容力の度合を知り、かつそれに見合った生息数にとどめておく必要があるが、そのいずれも現在まったく不明である。したがって、いまの段階で一揆に駆除をやめてしまふには、かなり不安が残る。そしてもう一つには、先にもふれたがヒグマの人畜作物に与える被害は完全にはなくしがたい。そこで万が一の備えも必要となる。そのためにはヒグマ猟に熟達した人を常にある程度維持しておく必要もあり、技量を落とさない程度の猟を続けることはどうしても必要である。

以上のことを総合して考えあわせただなかで一つの方策として浮かぶのが、駆除、狩猟

とも親子連れの捕獲を禁止する策である。親子の捕獲が繁殖基盤に与える影響は大きいと先に述べた。また親子連れはきわめて見分けがつきやすいため、親子とは知らずに撃ったという言いのがれもしくくなる。

そもそも一つの方策として、少なくとも人間の活動とはあまり関係のない国立公園内での、有害駆除という名もとの狩猟は、特別の場合を除いて制限すべきであろう。一木一草採ってはならない特別保護区内において、特に問題視されている個体以外でも駆除という名の狩猟が平然と行われていることは論外である。

このように有害駆除をみなおしたうえで、もう一つ捕獲の条件として資料の提出を義務づけることが必要である。体重とか体長とかいった所まではなかなか望めないが、少なくとも個体群の内容を知るために非常によい手がかりとなる年令を精査できるところの歯の提出を義務づけることなら可能であろう。望むならば一度頭骨を提出してもらい、年令査定、頭骨計測を行ったうえで返すというシステムがとれば一番よいが、それが無理なら抜きやすい第四前臼歯の提出だけでもとりあえずよい。こういったことを平行的に行わなければ、仮に親子連れを捕獲禁止にしても、それによる効果、影響がわからず、捕獲禁止の適否さえも不明のままになってしまい、今後の方策も考えにくい。アメリカでは狩猟の規制もさることながらたどれば狩猟が一年に三日間だけという所もある。捕獲個体の有効利用という点では、きわめてしっかりした方策をとっている所が多い。狩猟規制そのものは事情が違つたため一概に参考にならぬものが多いが、この捕獲個体の有効利用という点に関しては学ぶべきものが多い。

また、捕獲奨励金の見なおしも急務である。一般的にみて、お金を出してまでも捕獲を奨励するほどの事態でないことは何度もふれた。

そこで視点をがらりと変えて、たとえば一頭につき何万円かの奨励金をハンターに渡すのではなく、その分を基金として被害の時の補償等に備える制度にしたらどうだろうか。仮に一頭三万円としても、毎年数百万円から一千万円代という額になる。また場合によってはさらに一歩すすめて、一頭捕れば数十万円も手に入るハンターからいくらかずつ徴収するということも考えられる。

こういった捕獲制度そのものの根本的な見なおしのほかに、社会的な対ヒグマ関係の問題を今後もつと考えて行かねばならない。

たとえば、ひところ有名になった大雪高原温泉のケイコの問題が一つのよい例となる。高原温泉沼めぐりコースは、昨八二年はケイコファミリーや他のクマの出没が頻繁であるという理由で入山禁止になっていた。しかしケイコの仔と思われる幼獣二頭の射殺を経て、八三年夏現在、入山禁止を解禁してはどうか、その場合のとるべき処置はという話し合いがなされているという。筆者は解禁は当然のことと思う。特に危険なクマがいて問題を起こしているのならいざ知らず、通常の状態ではヒグマが生息しているのは、山深い国立公園ではあたりまえのことである。

そこでこのあたりまえの状況を、ヒグマと人間との接点を考えるうえでより有効に利用することを、この際考えたらよいと思う。たとえばただ一枚の入林許可証で入山させるのではなく、登山口に簡単なビジターセンターのようなものを設け、そこでヒグマを含めた大雪山の自然について逐次講義を行い、入山者に受講を義務づける。またヒグマに関する出沒状況や生態に関して、あるいは入山に関する心がまえなどの詳しいパンフレットを作製し、これを完全に読むまでは入山させないようにし、入山者により深くヒグマと人間との関りを考えてもらう。このような啓蒙活動を通りつづけては、入山者に強制的に行うようなことをそろそろわが国でも考えてもよいのではないだろうか。それにはケイコ問題で知れわたった高原温泉はもってこいと思われる。

これと同様なケースが知床横断道路でも考えられる。あの道路が原生の動物群集に与える影響は非常に大きいと聞く。

筆者も、この七月に所用があつて通過したが、斜里側は入口から峠直下まで全線にわたつて改修工事のさ中で、ほぼ切れ目なく人が働いていたにはおどろいた。あれでは半島をまっ二つに割る人為的バリヤーにはかならず、また、工事関係者が落として行く食物の食べのこしも相当な量であろう。それらを各種動物が新しいメニューとして利用し、そして人間との接近のきっかけとなり、また本来の生物間関係がみだされて行くのである。

九九%観光道路に過ぎないあの横断道路を廃道にできれば一番よいのだろうが、そうもいかなければ利用者にそれなりの注意、関心をうながす方策をとる必要がある。少なくとも単なるドライブコースの一つとしての利用はさけるべきである。たとえば各入口にゲートを設け、通過車輛は一旦停車して用便もかねて下車させる。そして、いま

から通る道路が知床半島において、本来どういう場所を占めているのか、どういう生物群集が存在しそれらに与える影響はどうかと言ったことをひと通り知らしめて、初めてゲートを開くようにする。また途中の駐停車はきびしく取締まり、とりわけ人為的食物散布の元凶となっている峠の違法な移動屋台を排除する。もちろん車内からのゴミのなげすては厳禁する。こういった措置をとるべきである。

わが国最後の秘境とも言われた知床半島のど真中にさえ、トウモロコシの食べかすが散乱し、それを食べにドブネズミやカラスやキツネ、時にはヒグマも寄ってくる―ヒグマの場合はそれだけでも、時には足跡が残っていたというだけでも人に近寄って来た危険なクマと報道され、たちまち駆除されるのである―にいたっては愕然たる思いを禁じ得ない。

有害駆除の問題を始め、高原温泉、あるいは知床横断道路の問題のよりよい解決の如きは、北海道のヒグマや野生の将来をうらなう布石たりうるし、真にわが国が先進国たりえるかどうかの試金石ともなるかも知れない。

六、おわりに

ヒグマは保護すべきか否か。こういった二者択一的問いかけのしばしばある中で、筆者は、とにかく保護すべきであるという先鋭的な保護論を持ち得ない。どちらかと言えば、生ある者いつか滅びるといふ万物流転が世のならいとさえ思っている。そのならいにしたがうならばわれわれ人類とて同じことであろう。それなのに、あれを滅ぼせ、これを残せというのはあまりにも目先にとらわれ過ぎ、あるいは人間の傲慢というものはなからうか。

しかし、言われなき有害視から駆除されつづけることの不合理性、そしてそれにより一部の者のみが利しているというヒグマをめぐる現状は、マスコミのとりあつかい方を含めていささか社会的公正を欠いたことと、義憤を禁じ得ない。そういう思いで筆をすすめた。

むろん筆者とて、未永く適切なヒグマ猟が行えるような状態が続けば、それにこしたことはないと思うのである。北海道の自然をいとしく思う者の一人として。

本論を終えるにあたり北大天塩演習林職員の皆様、北大ヒグマ研究グループの皆様、

特に捕獲個体調査担当の間野 勉氏、北大歯学部大森司紀之助教授、北海道庁自然保護課、および全道各地の猟友会会員の皆様に心から感謝致します。ハンターとの敵対関係の中からは、こういった仕事ですすむものではないということ、そしてヒグマの将来も考えられるものでもないということ、先鋭的ヒグマ保護論者である、某動物カメラマン氏にささげて終りとす。

(北大農学部附属天塩地方演習林)

参考文献

- ・青井俊樹(一九八二)未知の行動圏をなぐる。アニマル(十二)平凡社
- ・青井俊樹(一九八二)知床半島におけるヒグマについて。知床半島自然生態系総合調査報告書(動物篇)・二二六―二四四・北海道
- ・Kenneth r. greer. 1976 Managing Montana's Grizzly for the Grizzlies Bears, their biology and management. 177-189. IUCN New series. No. 40
- ・北海道・一九八三・狩猟統計資料
- ・北大ヒグマ研究グループ・一九八二 エソヒグマ―その生活を探る
汐文社・三二七頁
- ・Tom H Northcott and Fawn E. Elsey 1971 Fluctuations in Black bear Population and their Relationship to Climate. The Canadian field naturalist. Vol. 85 123-128
- ・William D. Tietje, Robert L. Ruff. 1980. Denning behavior of black bears in Boreal forest of Alberta. J. Wildl. Mgt. 44(4)858-870